

日本語の意味づけから社会で生きる自分を意味づける

道端輝子（早稲田大学大学院生）

1 研究の背景と目的

「この人は、日本語を自分のものになっている」本研究は発表者がある一人の人物に対して感じた、この驚きが始点となっている。鄭（2009）は、多くの日本語学習者は日本語が上手になりたいと言うが、日本語のレベルがいくら上級であっても「日本語がなかなか上手になりません」という悩みがたびたび聞かれると指摘する。この人物も、以前は「日本語が話せない。もっと上手になりたい。」と語っていた学習者の一人であったが、後に発表者との再会時には、自分自身の日本語を「結構いい」と語り、いきいきとこれまでの自分について語ってくれた。この驚くべき変化により、発表者は「この人は日本語を自分のものになっている」と感じたのである。この変化のプロセスとはどのようなものであるかを明らかにし、考察することを目的とする。

2 研究方法

2. 1 調査概要

2013年5月13日に1時間20分、2013年7月12日に2時間10分、ナラティブインタビューを行った。二回目にはインタビューと同時に「日本語グラフ」を研究協力者に描いてもらった。「日本語グラフ」は、ライフコース研究（グレン／ジャネット 2003）で用いられている「人生地図」を参考にし、各年齢もしくは年齢区分ごとに研究協力者により描かれるものである。研究協力者に過去から現在までの自分の日本語に対してより深く追想してもらうべく、「人生地図」を描いてもらいながら、語ってもらった。本研究ではこの地図を「日本語グラフ」と呼ぶことにする。また本研究で扱うデータは、次の通りである。

- 1) 2回にわたるナラティブインタビューのトランスクリプト、
- 2) 研究協力者によって描かれた「日本語グラフ」、
- 3) 研究協力者と発表者の間でやり取りしたメールのデータ、
- 4) 発表者作成のフィールドノーツをデータとして扱い、分析を進めることとする。

2. 2 分析方法

ナラティブ分析により全体を捉え、「日本語グラフ」の変化があるひとまとまりをより緻密に明らかにするために、カテゴリー化（佐藤 2008）し、分析する。

2. 3 分析結果と考察

分析により、この研究協力者にとって、日本語は「知識、学習する」ものという枠に収まりきるものではないということが明らかになった。様々な人と出会い、様々な役割を担いそれを果たそうとする中で、他者とのやりとりがうまくいかない、人とつながる、自分を認めてもらう、自分で自分を評価する等の過程で、様々な日本語を評価し、捉えていた。つまり、他者との関係性の中で、肯定的にも否定的にも様々な日本語を意味づけているのである。否定的に意味づけられた場合でも、それをばねにし [いやー、自分もうやるしかないぞって。頑張りますよって (130712)。], [マジでまずい (130712)。], [だから今年ね、一生懸命 (130513)。] という前に進もうとする力、「原動力」を生み出していたのである。

「知識、学習」からスタートした日本語であったが、他者との間で日本語を意味づけることにより、自己と他者の間に存在するものと変化し始めた。そして、「自分の日本語を意味づける」、「原動力で前に進む」、「ことばが他者との間に存在してくる」これらのプロセスは複雑に絡み合い、影響を与え合い、共鳴するような存在であると言えるであろう。この共鳴がもたらすものは、社会に存在する自分の人生という時間がただ闇雲に淡々と過ぎていくのではなく、社会と自分の間にある日本語ということばを意味づけることをきっかけにし、社会に存在する自分を意味づけることである。つまり、学習者が自分自身の日本語を意味づけることは、社会の中で生きる自分の存在を意味づける鍵の一つにもなりうるのである。

引用文献

グレン・H・エルダー／ジャネット・Z・ジール (Glen H. Elder Jr./Janet Z. Giele) 編
(2003) 『ライフコース研究の方法－質的ならびに量的アプローチ』明石書店。

佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法原理・方法・実践』新曜社。

鄭京姫 (2009) 『『自分の日本語』が育まれる日本語教育の必要性－『日本語が上手になりたい』ある学習者の変化から－』『日本語教育：ことばと文化の架け橋』Northern Book Centre。